

「ヴィーナスの嘆きの唄」(訳)

柴 田 竹 夫

悲しみに打ちひしがれる時

あの方の男らしさ 力強さ

誠実さ 堅実さを

思い出すことは

私にとって何よりの慰めなのです*

5

命ある限りこの身はすべてあの方のもの

誰も私を責められはしない

あの方の気高さを誰もが讃えているのですから

あの方には誰も推し量ることの出来ない

善良さ 知恵 自制心があります

10

まことに幸運に恵まれておられて

騎士道の華とも呼べる御方なのですから

その気高さゆえに名誉はあの方を讃え

更に「自然」はこれほど立派にあの方を創った*のだから

私は確かにいつまでもあの方のもの

15

あの方の気高さを誰もが讃えているのですから

あの方の様々な能力にも関わらず

あの方の優しい御心は 私に対して
言葉 ふるまい 態度においてこれほどに慎しみ深く
私に仕えるにまこと献身的なのです 20
私はまことに心安らぐ思いがいたします
私に仕え 私を讃えることがあの方の喜びですから
私はこの幸運をまことに有難く思います
あの方の気高さを誰もが讃えているのですから

II

確かに愛の神よ 汝の高貴な贈り物^{*}の代償が 25
高くついたとしても それはまことにふさわしいこと
寢床で目覚め 食事を断ち
笑いながら涙し 嘆きながら歌う
顔を 目を伏せる
しばしば顔色が変わり 30
眠りながら嘆き 踊りながら夢を見る^{*}
楽しい想いとは裏腹に

「嫉妬」は縄でつるされますように
「嫉妬」は詮索好きであらゆることを知りたがる
すると誰もが理性を失い 35
嫉妬に狂ってあらゆることは害となります
この様に愛の神は与えるものに対し高い代償を求め
しかもしばしば気ままに与えるのです
悲しみはたつぷり 喜びはわずか
楽しい想いとは裏腹に 40

愛の神の贈り物は束の間心地良いけれど
それを使おうとするとまことにいらだたしい
狡猾で人を欺く「嫉妬」が
しばしばそれを妨げるからです
この様に私どもは絶えず恐れ苦しみ
不安を抱いて苦しみやつれ
しばしば多くのつらい不幸に出会うのです
楽しい想いとは裏腹に

45

Ⅲ

だが愛の神よ あなたの罠から逃れたいと
言っているのではありません
あなたにかくも長い間私は仕えてきたのですから
それを止めようとは思いません
「嫉妬」が私を苦しめようともかまいません
お会い出来る時に御目に掛ればそれで十分なのです
それゆえに確かに私の終りの日まで
あの方をこよなく愛しても それを後悔はいたしません

50

55

確かに愛の神よ 想い描ける
あらゆる身分を顧みる時
あなたはあなたの気高さ 寛大さによって
この世で最高の人を私に選んでくれました
さあ心よ 立派に愛しなさい それを決して止めてはいけません
「嫉妬」に私の心を試させなさい
どの様な苦しみにも私は心変わりすることがないことを
あの方をこよなく愛しても それを後悔はいたしません

60

心よ あなたに対し愛の神がこれほどの恵みを与え 65
あらゆる点で最も価値あるものを
私の眼鏡に最もかなうものを選んでくれました
それで十分満足すべきことなのです
本通りでも小道でもこれ以上探し求めてはいけません
私は心ゆくまで満足を覚えましたから 70
そこで私はこの嘆きを唄い終えることにいたします
あの方をこよなく愛しても それを後悔はいたしません

結 語

王子よ^{*} この嘆きの唄を好意をもってお受け取り下さい
私のつたない力によって
あなたの優れた好意に対し捧げたものなのです 75
私の精神を鈍らせる「老年」が
私の記憶から詩作のあらゆる技巧を
ほとんど奪い去ってしまったからです
フランスの詩人^{*}の華であるグランソンの
比類なき技巧を一語一語たどることは 80
英語では韻がきわめて乏しいので
私にとってはまたきわめて苦難の技なのです

<作品：“ The Complaint of Venus” >

注

- 5行 この詩の語り手は Venus であり、従って彼女は真の騎士としての恋人の Mars
に呼び掛けている。
14行 beauty は nature の最良の作品という考えのこと。
25行 立派な恋人を贈られたこと。

27-31行 これらは恋の病の症状 (lover's malady) である。cf. "The Knight's Tale," I, 1372-6.

73行 "Princes" は "Princesse" の variant の可能性もある (M. E. D., "princes (se)").

79行 詩に言及して "make" "maker" という語の使用は中英語期の後期に初めて慣用となる。

"The Complaint of Venus" はおそらくチョーサーの友人であったフランスの詩人、Savoy の騎士 Otes de Granson (Oton de Grandson) (c. 1340-1397) の手になる ballades に基づく翻訳である (James I. Wimsatt, *Chaucer and the Poems of 'Ch'* [D. S. Brewer · Rowman & Littlefield, 1982], pp. 70-74 に Granson のテキスト記載)。envoy (結語) の部分はチョーサーの手によるものである。

チョーサーはこの詩の語り手を女性に変更したが、女性の語り手は珍しいことである。この詩は "The Complaint of Mars" に続くものであって、Mars に対し Venus が答えるという形を取ったのであると考えられる。更に "The Complaint of Mars" において Mars は John Holland, Duke of Exeter と、Venus は Isabel, Duchess of York と考えられてもいるのだが、チョーサーはこの詩においてもやはり Venus を Isabel と暗示しているとも考えられる。背景に a court scandal を見る方が面白いと思う。

この詩の制作年は不明だが、もしこれが、Isabel のために書かれたとするならば、1392年の彼女の死以前に書かれたことになる。

この詩において Venus について神話的あるいは占星術的な暗示は見られない。また通常の "complaint" の詩に見られる恋する人が "mercy" を求めるという形を明確には取っていない。

この詩は envoy 以外は ababbccb と韻を踏み、72行中8種類の異なる行末韻を持つが envoy のみ aabaabbaab と韻を踏み、10行中2種類だけの異なる行末韻を持つ。envoy においてチョーサーは英語の持つ韻の乏しさと Granson の技巧についていけない自らの非力さを嘆いているが、これは勿論 "affected modesty" のトポスであると同時に、3つの ballades の部分では各部分同一の韻を踏み、かつこの3つの部分 (12ヶ所において) と、envoy (4ヶ所において) を通じて1つの "—aunce" による韻を踏ませていることからわかるように、チョーサーは実は自らの技巧を示しているのである。